

中国勢可レ取ニ團上月一僉議事

愛ニ丹波国ノ住人赤井・波多野已下數十人一味同心シテ元春朝臣ヘ云送ケルハ、当国ヘ御馬ヲ被出候ヘカシ、各御先ヲ仕愛宕山ヘ攀上リ、京都ヲ目ノ下ニ直下シ責候ナハ、味方必勝 掌ノ中ニ候ヘシ。信長ハ定テ本能寺ニ在テ軍勢ハ皆愛宕山ヘ向、洛外ニ陣取候ヘシ。其時洛中ニ味方ノ勢ヲ忍テ入置相図ヲ定、所々ニ火ヲ懸焼立、不意ニ戦ヲ決候ハ、如何ニ猛キ信長ナリトモ一時ノ間ニ逃亡タルヘシ。京都ノ戦ニ利ヲ得候ハ、逃ル、敵ノ勞ニ乘、安土ヘ攻入、織田ノ一族 尽、ク討果可申候条、是非御発足候ヘカシ、ト云送りケリ。元春則レ領 掌シ給テ、出雲・伯耆・石見ノ勢ヲ催 已ニ丹波ヘ発向ト被レ定侍 二人丹州ヘ差上、国人ノ云処ノ謀ヲ尋聞給。此合戦ノ全 勝利ノ工夫ヲ成給フ。赤井已下、元春已ニ領 掌シ給ト聞テ大ニ悦ヒ、鬼力城ヲ取 誘、元春ノ本陣トセント

テ、ヒシタタト敵初シテ頓成就セシカハ、元春ノ出張ヲ今ヤ遅シト待居タリ。

カ、リケル処ニ宇喜田和泉守直家ヨリ隆景ヘ申ケルハ、尼子左衛門尉勝久・山中鹿助已下二千余騎播州上月ノ城ニ楯籠リ、美作国ヘ入ント欲候。某甲一身ノ謀ヲ以テ責落サンコトモイト安候ヘ共、羽柴筑前守後詰可仕候。左候ハ、申々數大事ニ候条、御出馬候ヘカシト云送りケリ。後ニ直家カ謀ヲ聞ケハ、尼子ニ真壁ヲ打レ、又先日秀吉ニ上月・矢嶋ヲ討セケル間、毛利勢ヲ引出シ尼子ヲ退治シテ其後元春・隆景ヲハ方便テ討、是ヲ信長ヘ忠節ト成サントノ隠謀ナリケルトソ聞エシ。カ、ルコトヲハ夢ニモ知不給隆景、急キ吉田ヘ打越給ヒテ、輝元朝臣ヘ此事 評定有ケリ。

尼子ハ当家従前ノ冤敵ナリ。今是ヲ退治セスンハ、囀レ臍益ナカルヘシトテ、上月出張ト被レ定。則レ元春父子ヘ輝元・隆景ヨリ丹波表ノ発向ヲ被レ聞、先播州ヘ上リ上月ヲ攻落シ、其後丹州ヘ被攻上候ヘ、ト云送り給ヒケリ。

最大の元就軍記にして、
戦国期西日本の治乱興亡
史の巨編、初の活字化。

陰徳記

限定五百部(番号入)

米原正義 校訂

マツノ書店

「陰徳記」目次(一)

解 説

凡 例

- 惠林院殿都落之事
惠林院殿從二四國二赴防州一事
惠林院殿額二大内義興一事
義植御上洛之事付人麻呂塚合戰之事
東寺合戰之事付西國勢敗北之事
舟岡山合戰之事付義澄卿討給事
義植御被成二石大臣一事
元就朝臣先相之事
元就朝臣元服付本卦之事
唐人來朝元就朝臣之見人相事
武田檢非遣使元繁下二向芸陽一事
武田取二困有田之城一付吉川高橋論二同城事
志道広好擊二元就後話一事
卷之第三
元就朝臣武田勢卜初度合戰之事
有田中井手合戰付熊井元直討死事
有田合戰付武田元繁討死之事
香川已斐討死之事
卷之第四
元繁御台場銀山給事
上野民部下二向吉田一事
兩御所御和陸付尼子經久攻二安世城一事
尼子先相事
經久立身事
經久方便三沢一事
卷之第五
大内義興下向之事
毛利備中守興元逝去之事
高橋大九郎討死之事
青屋城攻之事
安芸國西条鏡山落之事
幸松丸殿早世之事付元就朝臣毛利家督之事
相合上総介殿謀反付生害之事
桂広澄自害之事

その解 説 史実を述べてゐる。この目次は、大體、この書の内容を、力を入れて、しよつたのである。

- 大内銀山椋尾の兩城取巻之事付次休蔵之事
卷之第六
根之坂上合戰之事
武田光合戰之事
尼子勢銀山後詰付合戰之事
元就朝臣夜討事
大内勢敗軍之事
義興廿日市表敗軍之事
卷之第七
大内龍藏寺和陸之事并義興石州免向之事
浜田合戰之事
尼子敗軍之事付義興逝去事并歌事
大内先相事
元就朝臣上洛之事
熊谷兵庫助討二山中一事
武田熊谷半和之事
卷之第八
經久與久不快之事
龜井經久最後之暇乞事
佐田之城没落之事
塩治末次之城合戰之事
塩治備後上落、事付米原討死事
卷之第九
横川合戰之事
武田太郎判官光近逝去之事
武田衆評定之事
八木之小城攻事付武田衆分散之事
若狹之武田之事
卷之第十
塩治宮内太輔興久自害之事
塩治興久切二化生一事
備後國宮城合戰之事
備後國宮之山之城降参之事
元就朝臣与二義隆卿一一味之事
尼子民部太輔晴久吉田免向之評定之事
伯州大山明神之御事
武田刑部少輔頼三晴久一事
岩屋之城合戰之事
卷之第十一
吉田左京亮自害之事
石州温湯之城被二取圍一事
尼子修理大夫晴久實二河上之城一給事
小笠原降参之事
卷之第十二
福屋隆包殺重富党事付同女房戰死事
徳田刑部少輔異見之事
福光之城合戰之事
中村之城没落之事
石州川上之松山之城没落之事
福屋芸陽之新庄五働之事
福屋没落之事
隆包家人殺害之事并福光神主依レ勇被二助命一事
豊前國門司関合戰ノ事
卷之第十三
別府合戰之事
新原原之事付東賀高島自害之事
石州銀山之山吹之城攻事
本庄毛利家五一味之事付本庄太郎兵衛尉退二富田一事
晴久完道左馬助被レ擲事
元就朝臣雲州へ押入玉事付三沢三刀屋赤六已下屬三味方一事
米原平内兵衛尉降参之事并南条行本庄本田合戰之事
本庄父子誅戮之事
卷之第十四
雲州之國人心替之事
尼子修理大夫晴久逝去之事
三刀屋八咄合戰之事
三刀屋地主峠合戰之事
隆元朝臣赴防州給事
大友毛利和陸之事
毛利大膳大夫隆元逝去之事
出雲國白鹿之城攻事
雲州熊野城鉄炮擲之事付合戰之事
白鹿後詰之事付同城明渡事
卷之第十五
晴久吉田免向之事
太郎丸并池内合戰付湯原弥次郎討死之事
遺分合戰之事
大田口合戰之事
風越山宮崎合戰之事
孫阿弥討死之事
卷之第十六
山名依二蜂起一久伯州江被レ越事
伯州橋津川合戰付尼子兵部太輔討死并武田山城守最後之事
南条吉田合戰之事
南条討二小鴨一事
土取場合戰之事
吉川高尾黒正官崎江合戦事
卷之第十七
大内勢後詰之事付宮崎合戰之事
青三猪山合戰付尼子下野守討死事
尼子民部大輔敗軍之事
佐藤銀山城并廿日市椋尾城没落之事
卷之第十八
大内大宰大式義隆出雲免向露議之事
尼子經久逝去并義隆卿出雲免向之事
熊谷平藏直統討死之事
赤穴之城明退事
富田菅之谷蓮池合戰之事
金尾之洞光寺合戰事
富田川合戰之事
卷之第十九
備後石之武士心替之事
大内大宰大式義隆卿敗軍之事付周防介最後事
小早川正平討死之事
河津民部左衛門尉戰死之事
卷之第二十
尼子晴久石州免向之事
尼子因幡免向之事
牛尾卯山合戰評定之事
備後國野合戰之事
尼子紀伊守父子三人備作之城攻事
卷之第二十一
隆景朝臣小早川家相統之事
吉川治部少輔興経与二家老一不和之事
少輔次郎元春与熊谷信直息女嫁娶之事
少輔次郎元春吉川家相統之事
備後國ノ神辺城合戰事
元就朝臣父子山口下向之事
内藤興盛与毛利隆元婚札相調事
平賀杉原合戰之事
右馬頭元就掃城付深野入道未來謙言之事
紹鷄教奇就並觀世宗節閨寺小町能事
卷之第二十二
義隆卿究二諸道之淵源一事
冷泉判官隆豊諫言之事
手島内蔵丞之事
興経弓馬之嗜之事
興経最後之事
手嶋兄弟最後事
卷之第二十三
備後國神辺之城没落付目黒最後事
冷泉判官隆豊諫言之事
陶相良不快之事
久村玄藩允被レ誅粹
安芸國嚴島千句之事
卷之第二十四
相良遠江守落二山口一事
山口物怪之事
陶隆房隱謀之評定之事
陶隱居付冷泉諫言之事
元就与隆房一味之事
冷泉夜討合議事
卷之第二十五
安芸國頭崎之城明退事
義隆卿山口没落之事
義隆卿法泉寺落之事
義隆卿遭二難風一給事并公家衆最後事
三位中將殿大内新介最後事
安芸西条椋尾之城没落之事
卷之第二十六
陶入道討二杉重政一事
備後國志川滝山没落之事
山口興廃之事
陶兵庫入道嫡子殺二次郎一事
左京大夫山口入之事
長州深川大寧寺之事
卷之第二十七
元就朝臣輝元朝臣長府江下向之事
卷之第二十八
尼子勝久出雲江被レ入事
天野紀伊守方便敵一事
真木宗右衛門尉之事
庄式部少輔合戰之事
雲伯作備背二毛利家一事
雲州富田麓合戰之事
卷之第二十九
出雲國原手合戰之事
出雲國三保関合戰之事
神西三郎左衛門心替之事
美作國高田之城合戰之事
玉串監物討死之事
卷之第三十
備後國神辺城合戰并防州関所城合戰之事
大内太郎左衛門輝弘山口入之事
仁保合戰之事
元春隆景引二弘立華之陣一事
立華城明渡事
輝弘山口落付最後事
杉松寿丸之事
出雲國日昇合戰之事
卷之第三十一
出雲國比部合戰之事
末次之上井明退事
元就朝臣敵味方之嗜之事
卷之第三十二
出雲國三笠之城没落之事
熊野降参并高瀬城討廻之事
平田之城并勝間其外所々之城合戰之事
輝元朝臣隆景元開陣古志降参之事
羽倉之城合戰之事
源勝久攻末次給事同後詰并米原降参事
三村一家滅亡之事并三村三家之被二邪說一事
卷之第三十三
伯州淨満原合戰之事
馬田討死之事
羽倉孫兵衛尉討死之事
秋山父子心替之事
元就朝臣逝去并鹿助生捕之事
鹿助愁訴之事并八橋之城明渡事
卷之第三十四
備後國泉合戰之事
毛利平賀座敷論并祝之城没落之事
三村属二毛利家一事并猿掛城合戰之事
三村徳田重而合戰之事
卷之第三十五
尼子晴久備州働事付高田合戰之事
浦上敗軍之事并田太子堂合戰之事
井上一党誅戮之事
尼子晴久殺二新宮党一事
尼子吏部之子息向人生害事
卷之第三十六
毛利陶手切之事
吉見頼信与二陶道麒一刺違事
正頼相二統吉見家一事
江良丹後守来二吉田一事
嘉年之城没落并陶津和野江免向之事
元就朝臣神領江打出給事
安芸國銀山小城椋尾之城明退事
宮川甲斐守上二芸陽一事
安芸國廿日市折敷畑合戰之事
神領明石合戰之事
卷之第三十七
石州長安之城明退事并大田懸之橋合戰之事
野間隆実降参之事
陶与二吉見一和陸之事
元就朝臣佐西郡討入給事
江良丹後守陶入道江諫言之事
深野入道陶江見見之事
江良丹後守生害之事
三浦越中守二保島合戰之事
卷之第三十八
元就朝臣之城築給事
三浦越中守仁保島合戰之事
陶入道嚴島渡海之評定之事
卷之第三十九
陶尾張入道嚴島江被レ押渡一事
陶入道三嚴島之城攻事付元就朝臣後詰之事
能嶋久留島与三元就二一味之事付
弘中参河守軍評定之事
嚴島之城後詰之軍評定之事
卷之第四十
山中鹿助逐電之事
卷之第四十一
武田上杉二自元春使之事付信玄謙信之嗜之事
佐々木信玄謙信之物語之事
卷之第四十二
將軍義昭御流津付三浦諫言之事
安國寺上洛事
山中立原信長江出事
吉川元春同元長因幡免向之事
卷之第四十三
山中鹿助与大坪合戰之事
私部城合戰之事
大坪与武田龜井合戰之事
因幡國鳥取之城合戰之事
若佐合戰之事
諸寄合戰之事
勝久明二退鳥取一事
牛尾山中合戰之事
私部麓合戰之事
私部麓合戰之事
若佐鬼之城没落之事
卷之第四十四
大坂之城江入二兵糧一事
親黨上人系國事付信長所二望本願寺一事
浦上宗景流津之事并浦上泰二討二普光院殿一事
將軍義昭御流津下向之事
卷之第四十五
乃美心替之事
讚岐國元吉表合戰之事
因幡國指尾駒夜夜討之事
淡路國岩屋之城之事
播州上月之城江勝久入給事
秀吉謀略二上月之城一事付勝久再入二此城事
卷之第四十六
中国勢可レ取二關上月城一合議之事
元春隆景被二取二關上月城一事付秀吉後詰事
杉原手者忍討并後詰勢馳加事
元長夜合戰之事會議事
卷之第四十七
上月之城忍害三台無一事
從勝久秀吉江通路之者擲捕事
(以下略、全八十一卷)

「陰徳記」目次(二)



『陰徳記』の出版を喜ぶ

京都女子大学教授 笹川 祥生

『陰徳記』の存在は、今から三十年ばかりの昔、毛利氏関連の文献を調べているときに知った。始めのうち、それは『陰徳太平記』の原作で、『陰徳太平記』を論ずるために、目を通して置くべき作品だというぐらいの意識しかなかった。しかし、『陰徳太平記』と読み合わせて、ノートを作っていくと、両書は、原作と増補本という単純な関係でないような気がしてきた。そして、両書はそれぞれ、執筆の目的も姿勢も違う、いわば別個の作品として評価するべきものだ、ということに思い当たった。『陰徳記』は、『陰徳太平記』論究の参考資料にとどまるべき存在ではなくて、香川正矩・宣阿父子の思いには合致しないかも知れないが、それ自体考察の対象となるべき作品なのである。

基本的な執筆の姿勢の相違は、たとえば記事の取捨選択の仕方の相違となって現れる。文芸芸能に関する記事に限って考えても、『陰徳記』にあつて、『陰徳太平記』に見えない記事が少なくない。これは地方における文化の受容のあり方を考える場合、無視できないことである。また、題材は共通でも、扱い方が異なり、『陰徳太平記』の記事では古風な趣きの薄れていることがあつたりする。また、方言や俚語の例も採集できるし、『陰徳記』のみ収録されている朝鮮語資料(巻七十六「高麗詞之事」)については、すでに何編かの研究論文もある。紙数の関係上、実例を示して説明する余裕はないが、『陰徳記』から得られる話題は、なかなか豊富である。また、両書は著作の時期と作者が明らかであり、先行文献も成立時期・著者の判明しているものが少なくないから、軍記の変質する過程を考察する場合などでも扱いやすい。

しかしながら、なんとといっても『陰徳記』は大部の作品であり、また、限られた数の写本しか伝わっていない。その昔、山口県文書館本を自分で撮影をしたが、随分と時間もかかり、その上、素人写真で、決して良い出来上がりではなく、読むのに苦労したことが思い出される。文書館の人と、どこかの書店から出版されればよろしいのに、無理でしょうね、などと話し合ったことを覚えている。そんな事情もあつて、今回の『陰徳記』の刊行は、ほんとうに嬉しい。そして、まだ戦国の余熱の冷めない時期に成立したこの力作を、資料として利用し易くなったことは、文学研究の面からも、大いに意義があり、その普及を期待する次第である。



待望久しい快挙

八雲立つ風土記の丘所長
県立島根女子短大名誉教授

藤岡 大拙

このたび、米原正義博士の校注による『陰徳記』が刊行されるはこびとなったことは、西日本の戦国史を研究するものにとつて、実に待望久しい快挙である。とりわけ、我々尼子氏の研究者は、どれほど長い間待ちのぞんでいたことか。山陰地方を語る軍記物語は他地域に比して少なく、わずかに『雲陽軍実記』と『陰徳太平記』が存在するていどである。

『陰徳太平記』は『陰徳記』の著書、香川正矩の次男景継(宣阿)が著わしたもので、すでに正徳二年(一七一二)木版本が刊行されており、明治四十四年には犬山仙之助によって活字印刷本が刊行されている。その後も出版がなされ、現在は米原氏校注の『陰徳太平記』全六巻(東洋書院)があつて、研究者には便利である。

『陰徳太平記』の原本とでもいべきものが『陰徳記』で、父正矩の著を子宣阿が敷衍した形となっている。ただ、『陰徳太平記』の記述は、中国の故事をふんだんに引用するなど、粉飾冗長のうらみがあり、さらに筆者の香川宣阿が主家吉川氏、その主家毛利氏を美化、正当化しようとする意識を強くもっていたので、そのぶん、史実から遠ざかる点なきにしもあらずであつた。

例えばよく指摘されることだが、陶隆房(晴賢)が主君大内義隆に反逆したとき、毛利元就は両陣営から誘引されるのであるが、当時の隆房の実力と己の実力を考えて、一応、隆房に誼を通じた。しかるに『陰徳太平記』によると、隆房の誘いを断わり、「八逆罪の者に、誰が一味すべきとて、曾て承引無く、義隆一味の駭にとて、同七月七日、芸州頭崎を攻られけり」とあつて、頭崎城の平賀隆保は陶隆房方となつており、元就はこれを攻めているから大内方ということになる。しかし、これは史実と正反対である。『陰徳記』では、元就は隆房の弑逆の罪を糺そうとおもつたが、力が弱く、義兵を挙げることができなかったのだ、しばらく隆房方に他心のない験を示すため、大内方の平賀隆保を頭崎城に攻め亡ぼした、と事実を述べている。宣阿は、なぜ『陰徳記』の記事を正反対に曲げてしまったのだろうか。それは、元就が反逆者に味方したとの印象を払拭しようとしたからであり、その結果、史実を曲げるといふ重大な誤りをおかしてしまったのである。

『陰徳記』の「元就与隆房一味事」の項目も、『陰徳太平記』では削除されている。したがって、「時好を追ひ文を飾り、無稽の談を加へたるを以て、正確の事蹟、引用すべからざる俗本となれり、識者正矩の原稿の伝はらざるを憾む」(『三州遺事』)との酷評もあるくらいだ。その識者正矩の原稿こそ『陰徳記』なのである。『陰徳記』も本来、毛利家中心の軍記物語として成立したものはあるが、『陰徳太平記』ほど毛利中心主義ではなく、かつペダンティックな故事引用もすくないから、それだけ史実に近い記述といえるだろう。

長い間、『陰徳太平記』しか閲読できなかった我々にとつて、本書の出版は近來にない一大快事である。大内、尼子、毛利三つ巴の戦国史に、新たな光が照射されるのは確実である。

『陰徳記』のこと

本書は、戦国時代から安土桃山時代に至る約百年、西日本を舞台に繰り広げられた、群雄の治乱興亡史の集大成である。毛利氏の中国制覇を中心とした「元就軍記」としても、最も雄大かつ詳細なものといえよう。

室町幕府十代将軍足利義隆が中央政府の抗争に敗れ、西国への都落ちに世の興廃を感じるところから筆を起し、豊臣家の五人の大名、三人の奉行が太閤秀吉の遺言を守り、遺児、幼君秀頼に忠節を励む場面で終わる、全八十一巻である。

著者の香川正矩は、慶長十八年生まれ、岩国藩家老。『陰徳記』を書くため、既成の文書・記録のみに頼らず、自ら古老を訪ね、また諸国へ物聞きを派遣して資料を集めたという。

書名は、中国漢代の『淮南子』などに見える言葉「陰徳陽報」から、元就の「陰徳」により毛利家の長久、国土安全の基礎ができたという考えに基づくものである。

本書の原本は現存せず、今回の出版は諸写本のうち、毛利家三卿伝編纂所の「山口県文書館蔵本」を主に、吉川家に伝わる「岩国徴古館蔵本」を参考にした。

なお巻末に付録として「関係系図」「関係要図」「安西軍策総目」「陰徳太平記総目録」をつけた。

『陰徳記』の著者香川正矩の次男、梅月堂宣阿が、父の書

いた本に補筆し、五十年後に刊行したのが『陰徳太平記』である。先に活字化されたため『陰徳記』より知られている。

しかし『三州遺事』の「梅月堂宣阿」の項に「此の書(『陰徳太平記』)時好を追ひ文を飾り、無稽の談を加へたるを以て、正確の事蹟引用すべからざる俗本となれり。識者正矩の原稿(『陰徳記』)の伝はらざるを憾む」とある通り、史料としては『陰徳記』が圧倒的にすぐれている。

校訂者について

校訂者の米原正義氏は大正十二年、島根県に生まれる。現在、國學院大學名誉教授。戦国時代史の第一人者として知られている。『戦国武士と文芸の研究』で日本学士院賞を受賞。校注では『戦国期中国史料撰』『陰徳太平記』全六巻など、著書は『千利休』ほか多数。

刊行にあたって

山口県文書館と岩国徴古館の許可を取り、何千枚のコピーを撮らせて頂き、それを米原先生の研究室に持ち込んだのはちょうど七年前でした。その後、國學院大學を訪れること数知れず。先生の定年退職後は、府中市のご自宅を何度も訪れようやく刊行の運びとなりました。

奇しくも来年のNHK大河ドラマは、本書の主人公「毛利元就」に決まり、少しは報われたという思いです。(店主)



- 体裁 全二巻 上製箱入 A5判 一六〇〇頁
- 予約特価 四〇,〇〇〇円
- 定価 四六,〇〇〇円
- 三点セット特価 申込ハガキをご覧ください。
- 予約締切 96年5月末(厳守)
- 発売 96年6月末(予定)

限定五百部 (番号入)
▼僅少数につき、売切れの際はご容赦願います。
▼書店には卸しません。同封のハガキで直接お申し込み下さい。
山口県徳山市銀座二の一三
〒755 0003 03(04)三九五
マツノ書店

ル。

忠興此合戦ニ利ヲ失無念ニヤ思ケン、其後又五百計ニテ討テ出、足輕迫合ヲ始メケル処ニ、完戸雅楽頭隆家手勢七百計引具シテ馳向無手ト渡合テ攻戦フ。隆家ノ郎等

江田重助ト云者ト、忠興ノ手ノ者長田左亮・壇上監物ト云者ト渡合違ヲ合防戦。其外完戸家人中少輔四郎ナ

ト無ニ比類ニ働シテケリ。敵モ味方モ手負死人數多有ケルカ、互ニ戦屈シテ左右へ颯トソ引ニケル。陶隆房、完戸

カ働異、他ト大ニ感セラレニケリ。其後仕寄ヲ付昼夜ノ境モナク攻ケレトモ、杉原忠興近国無双ノ勇士ニテ敵ノ

猛勢ニモ些トモ不レ疼防戦ケリ。城ノ地嶮難ニシテ將兵トモニ剛強也。而籠ル所ノ軍兵一千五百余人ナリケレハ、如何ニ攻トモ輒可レ落トハ不レ見ケリ。

カ、リケル処ニ平賀太郎左衛門尉隆宗、陶尾張守二向、某ト忠興ハ去子細ノ候テ年来結恨山ノ如クニ候。余リニ

面ノ憎ク候間渠カ所領尽ク給リ候ハ、隆宗一身ノ智略ヲ以テ忠興カ城ヲ拔頸ヲ太刀ノ先ニ貫齧懷ヲ散候ヘシ、

ト望ケレハ隆房其コソ何様ニモ隆宗ノ所望ニ可レ任ト領

掌セラレケル間、平賀大ニ悦、更ハ向城構候儀御扶助ヲ得候ヘシ、ト申ケレハ隆房則惣陣へ人夫可被レ出ト触廻

シ、向城如レ形築キ平賀ニ渡シ、陶・毛利・吉川・小早川・完戸已下開陣シ給ケリ。カ、リシカハ太郎左衛門隆宗向

城へ八百余騎ニテ楯籠リケレハ、杉原宮内少輔此由ヲ聞テ、平賀カ我ニ遺恨アリトテ当城ヲ己一人トシ攻落サン

トノ荒言憎キ小男メカ所存哉、唯今渠ヲ手捕ニシテ当城ノ門外ニ引居、頭ヲ可レ勿物ヲ、ト躍上リ、々々忿ニケリ。

元就朝臣父子山口下向之事

從二位中納言義隆卿出雲表ノ合戦大ニ利ヲ失給シカハ、備芸石ノ国人等半過テ尼子ニ可レ属ト世挙テ思ケル

処ニ、大内ハ九国ヲモ如レ形打随へ日本ニ二人ト無大名ナレハ、安芸ノ國中ノ武士トモハ一人モ大内ヲ不レ背、石

見・備後ノ国人等モ元就朝臣ノ謀略ニ依テ、尼子ヲ背、